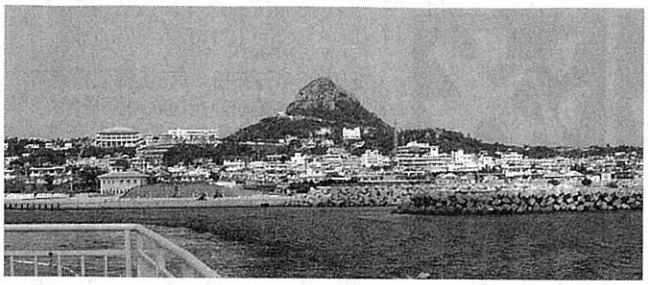
「沖縄県・伊江島」民泊事業への取り組み

全国に先駆けて成功したコミュニティービジネス

開　梨香
株式会社カルティベイト代表取締役



沖縄県北部の離島・伊江島。外周二十二キロ。東西八・六キロ、南北三・六キロ、ピーナッツ型の平たい島である。海洋博公園「沖縄美ら海（ちゅらうみ）水族館」から見える尖った山がランドマークの小さな島が、今、全国的な注目を集めている。

伊江島観光協会の音頭で民泊事業を始めて五年。今や伊江島は、修学旅行で年間二万三千人を受け入れ、経済効果が二億円を超える一大産業へと成長した。全国的に体験滞在交流型観光が盛んになるなか、成功モデルと称される伊江島民泊事業の歴史をレポートした。

伊江島の基幹産業は農業である。古くから農業先進地として知られ、沖縄本島や本土からの視察も多い。農業の三本柱は、葉タバコ、電照菊、そして畜産。平成十九年度の農業総生産は約四十億円。ピーク時約十四億円あった葉タバコは約七億円、約二十億円あった電照菊は約十二億円に落ち込んだ。唯一元気があるのは畜産。約五千百名の島の人口に追いつくほどの勢いで増えた牛は四千五百頭になり、年間約十億円の小牛を出荷している。その他、冬瓜や島らっきょう、紅芋なども栽培しているが、数字的には小さい。

島嶼県沖縄で、島々の経済を支えてきたのは公共工事である。伊江島も五～六年前まではまだ公共工事の盛んな島だった。しかし、すでに行政が整えるべき事業の終了が見え始めた平成十四年、山城克己氏は伊江島観光協会の会長についた。

落ち込んでいる第一次産業を絡めた観光産業をどう伸ばしていくか、それを真剣に考えなくてはいけない時期に来ている。そう察知した彼は、すぐに行動を起こし、島の宿泊業者を一堂に集めた。

「村の公共工事はあと二、三年でなくなる。今のうちから対策を立てないと、公共工事のお客さんは見込めなくなる」

しかし、当時はどの民宿も工事の作業員で満杯。誰も聞く耳を持ってはくれなかった。

平成十五年、本土のある高校の校長先生が各旅行社へ通達を出した。

「沖縄への修学旅行で、南部戦跡や、観光地を巡る時代は終った。これからは人々や文化、生活に触れられる旅を企画した旅行社と契約をする」

すぐさま旅行会社から伊江島の観光協会に、民泊をやってみないかと声がかかった。

大きな転機の訪れだった。興味を持った観光協会の役員三名が、一軒一軒の民家を回り、各家庭で三名から五名の修学旅行生の受け入れを頼んだ。やっと三十軒を確保できた平成十五年五月、テストケースとしてまず東大阪市の中学校を受け入れた。フェリーで訪れた子どもたちを港で迎えて入

村式をし、滞在中は農業や漁業などを体験させて民家に一泊。翌日離村式をして、子ども達を送り出すという内容だった。平成十五年といえば、ガングロ、ヤマンバ、ヘソ出しルックが流行していた年。真っ黒な顔で、おヘソを出して船から降りてきた子ども達の姿に、島のおじいちゃん、おばあちゃんは仰天した。子ども達が帰った直後、各家庭では夫婦・親子・家族喧嘩が相次いだという。受け入れ後の反省会で、民家は役員に怒りをぶつけた。

「子ども達を家に連れて行ったとたん、殴り合いのケンカが始まった」

「民家の親父がタバコを出せといったら、ポケットからタバコを出した」

「夜、スーパーへ連れて行くと、知らない間にチューハイを買っていた」

「夜中の十二時から隣の家の彼氏に会いに行くんだと、家から出ようとした」

ある農家では、子どもに菊の剪定作業を手伝わせた。伊江島の栽培は大菊。中心の一輪を大きくするために、その周囲のつぼみを手作業で取り除いていく必要がある。ところが、その作業を任せた子どもは、バッチンバッチンと真ん中の大きなつぼみを折っていった。大切に育ててきた菊への仕打ちに農家の親父は激怒した。「許さん。お前達は親に殴られたことがないんだろう！」と子ども達を追っかけて殴った。

怒りが収まらない民家の人たちを前に山城会長は、「一回だけのトライアルで結論を出したくない、どうか三回目までチャンスをくれ」と懇願した。

二回目の受け入れは、岐阜県の山の中の小さな中学校だった。その子ども達は、島の子ども達よりも、清らかで純粋な心を持っていた。三回目に受け入れた学校は、日本一の秀才校といわれている東京の開成高校。将来の目標や目的意識をしっかり持った子ども達だった。こうして五月から八月まで、見事に全く違うタイプの三校を受け入れてテストケースが終了した。

三回目の民泊の後、島の肉屋のお兄さんが山城会長に聞いた。

「アニキ、夕べも泊まりがあったのか？」

その肉屋は受け入れ民家ではなかった。

「子ども達が来る日は、うちの肉が全部売り切れるんだよ」

さしみ屋のおばあもさしみが全部なくなると喜んだ。子ども達を受け入れるときに前金で民家に支払ったお金が、一晩のうちに島中の小さな商店にばら撒かれたのだ。目に見える経済波及効果だった。

その年の夏休み前、一本の電話が観光協会に入った。一回目に受け入れた東大阪の中学校の先生からだった。数人の教師で伊江島に行きたいので、子ども達を預かった民家を集めてほしいという依頼だった。

夏休みが始まってすぐ十名の先生が飛んで来た。会場となった港二階のレストランには受け入れ民家の約半数以上が集まった。そこで先生が言った。

「皆さんが預かった生徒達が、それぞれの民家で何をしたか、すべてお話しください」

夜中に家を出ようとした女の子を預かった親父は、

「自分の子どもは夜の八時を過ぎたら、外には出さない。その子が寝つく朝の五時まで玄関で見張り番をした」

タバコを取り上げた親父は、

「自分の子どもには、タバコや酒はいっさいのまさない。預かったからには自分の子どもだ」

各民家でいろいろな指導をしたことを先生方に伝えた。

「今皆さんがおっしゃっている子供達の名前は聞かなくてもわかります。本当に申し訳ありませんでした」。先生は立ち上がって頭を下げた。

「皆さんにはご迷惑をおかけしましたが、今、学校が変わりつつあります。修学旅行でわずか一泊島に泊まった子ども達が、修学旅行に引率で来られなかった先生を捕まえて、職員室でいろいろな話をするんです」

今まで教師と生徒間で取れなかったコミュニケーションが、たった一泊で変化した。五月の修学旅行から夏休みまで、修学旅行の話を通して、子どもと教師、子ども達同士、先輩と後輩など、学校中の風通しがよくなったというのだ。

「今私達の中学は、間違いなく生まれ変わろう

としています。本当にありがとうございました。どうか来年もぜひよろしくお願いします」

先生は民家へお礼を言い、次回の受け入れを頼んだ。

誰一人返事をしない。懇親会に移り、少しお酒が入った時点で、先生が口を開いた。

「実は、うちの子ども達の保護者の多くは夜の仕事なのです。寂しい思いをしている子ども達は平気で夜から外出しようとします」

子ども達の行動の背景を初めて理解した島の人達は、来年の受け入れを約束した。

一年目、ヘソ出しルックでフェリーから降りてきた子ども達は、二年目は普段着でやって来た。三回目に来たときはジャージ姿。しかも、校長先生が同行し、受け入れ民家一軒一軒へお礼に回った。四年目からは制服。今年の五月も制服で島を訪れたこの中学校は、修学旅行の前にはインターネットで伊江島について調べ、島の人達が知らないような歴史などもレポートにして、事前に民家へ手紙を出すほどになった。それほど学校が変わっていったのである。

三校の受け入れを通して、島ぐるみで民泊事業に取り組むべきだと考えた山城会長や観光協会の役員達は、問題点、改善点、課題点をレポートにして「民泊事業は間違いなく島興し事業になる」と村長へ直訴した。

すぐさま村長命令で、農協組合長・漁協組合長・商工会長など島の五つの団体の長がひとつのテーブルについた。「農業の講師が必要なら私がやります」「海で先生が必要なら私が講演をします」と農協組合長・漁協組合長がすぐさま賛同した。島の商店が潤う事業に商工会長が反対するわけはない。

伊江島の民泊事業は村のトップ達の意識統一のもとスタートした。が、解決すべき問題は山積していた。まずは既存の宿泊施設との関係である。

当時の伊江島の宿泊施設は、民宿六軒、ホテル三軒、ペンション二軒。宿泊事業者を集め、観光協会の収益事業として民泊事業を始めたいと相談を持ちかけた。

「そんなことをしたら、うちの民宿がつぶれるんじゃないか」

当たり前の心配である。しかし、一軒の民宿で受け入れられる人数は、二十～三十名。修学旅行生は百名単位。そのため、当時の修学旅行生は日帰りで伊江島に立ち寄る程度だった。山城会長・古堅副会長は修学旅行が普段の客層と違うことを根気よく説得した。それが功を奏し、各宿泊施設は今や民泊部会の会員として、民宿での民泊を行っている。こうして平成十六年、観光協会の総会で、正式に民泊事業に取り組むことが決定された。

総会で議決した直後、保健所から呼び出しの電話が入った。観光協会の正副会長と役場の担当職員が保健所へ赴くと、旅館業法、保健所の食品衛生法、消防法の各担当が待っていた。

「宿泊施設の許可を与えている宿は島には十何軒しかないが、これだけの宿泊者を泊めるとはどういうことだ」

「料理は出してない、子ども達に自由にＢＢＱをさせているだけだ。島の食堂や、島で売っている弁当もすすめている。朝は子ども達と一緒に目玉焼きを作って食べている程度である」

これを聞いて、まず食品衛生法の担当が退席した。続いて、消防法の所轄である消防署も出て行った。最後に残ったのは旅館業法の担当だった。民宿を始めるには、旅館業法という許可が必要だと言い張った。

「会長の言い分は屁理屈だ。子ども達を民家に泊めるんだから、私は断固認めない」

「行政として指導する立場なんだったら、あれがだめ、これがだめじゃなくて、こうしたらできると指導してほしい」

簡易宿泊の許可だけでも取ってほしいと担当が言った。クリアできる条件を聞くと、台所が宿泊者と家庭用と別々。風呂場・トイレが男女別々云々。そんな民家があるわけがない。まずは条件をクリアできる民家から始めることで折り合った。

しかし、これでは、受け入れ民家を増やせない。対応策に苦悩している時、山城会長は当時の小泉首相の特区改革を活用することを思い立った。早速県庁へ出向いた。待っていた三名の県庁職員に、伊江島の島興し事業で民泊を進めているが法律の問題で困っていること、伊江島を特区とし、民泊を許可してほしいことを伝えた。半年間の勉強会

を経ての特区申請を前に、山城会長はまず、国に対して公に質問を投げかけるインターネットの公開制度を使って、伊江島の観光協会でやっている民泊事業が、旅館業法の法律に違反するかどうかを直接聞くという手段に出た。三日後、国の担当者から「資料を見る限り、伊江島の民泊事業は旅館業法の適応範囲外」との連絡がきた。山城会長は飛び上がって喜んだ。

子どもを預かる民泊事業では、受け入れ側が青ざめる場面がざらに起こる。

ある日の夕飯後、一人の女の子が民家の親父に言った。

「お父さん、あたし死にたい」

見ると、その子の手首には自殺を繰り返したリストカットの跡がある。民家の親父は、その家に泊まった他の二名の女子とともに、その子をドライブに連れ出した。

伊江島は、六十年前の戦争で、激しい地上戦の末四千二百名の人が命を失った。日本軍による略奪暴行、住民同士の「集団自決」による殺し合いなど、沖縄戦の縮図ともいえる島である。彼は、そんな島の歴史を子ども達に話して聞かせた。

「お前達には黙っていたけど、俺には人に見えないものが見える。この伊江島には、この世に未練を残して死んでいった人がたくさんいる。六十年前の戦争の時、多くのおじいやおばあ、子ども達が亡くなった。ここでもあそこでも悲しそうな顔で俺を見ているよ」

山やガマを点々としながら親父は悲惨な島の歴史を聞かせた。そして、最後に彼女たちを連れて行ったのは自分の親の墓だった。

「俺は悲しい時や悩み、相談事がある時、いつも親父に会いに来る。だけど、おれの親父は現れてくれない。農家の親父は天寿を全うして八十六歳で亡くなった。俺には、この世に未練を残して亡くなった人は見えるけど、天寿を全うして星になった人は来てくれないんだ」

翌日、島を去る子ども達一人ひとりが港で感想を述べるなか、涙を流しながらその子が言った。

「夕べ私がお世話になったお父さんは変なお父さんでした。人が見えないものを見ることができる人でした。私は大きくなったら、必ずお父さんに会いに来ます」

すぐさま山城会長は、離村式に参列していない親父に会いに行った。

「いったい何があったんだ。どうして来なかったんだ」

その子は、異性関係のことで地域から白い目で見られ、不安定な精神状態にあったのだった。

「会えば俺も泣いてしまうから……」と前夜の出来事を説明する親父の手を山城会長は強く握りしめた。「ありがとう。もうその子に死ぬ意思はないよ、みんなの前で約束したよ。大きくなったら必ず伊江島のお父さんに会いに来ますと」

三年後、高校生達が観光協会を訪れた。なんとその子の友達だった。高校生になって、再び民泊で伊江島にやって来たのだ。聞くと、その子は高校に進学したけれど学校は辞め、伊江島のお父さんに会いにいくために、一生懸命コンビニでアルバイトしているということだった。その女の子と農家の親父は、今でも連絡を取り合っているという。

交流は双方向。地域の受け入れ側にも変化が起こる。

今年の一月に、ウミンチュ（漁師）の奥さんが言った。

「会長ありがとうね。会長には黙っていたけど、民泊をする前、我が家はいつ離婚してもおかしくない状況だったよ。都会に出て就職をしていた息子が、精神を患って帰ったきり自宅に引きもってた。でも息子が作った海細工やストラップに子ども達が興味を持ち、息子に作り方を学ぶようになった。そのうちに息子は立ち直って、自分の作った商品を、港の物産センターに納品するまでにな

ったよ」

そこの親父も最初は子ども達を預かることに前向きではなかったという。

「おじいちゃん、この魚なんていう名前なの？」

「この魚おいしいね」

子どものほうはお構いなしに声をかけてくる。最初は照れくさがった親父が今では、自分が釣った一番おいしい魚を隠しておいて、子ども達が来たら自ら魚汁を作ってあげるくらいに民泊事業にはまり込んでいるという。

「これほど多くの人を巻き込んで、島に来る子ども達・先生・学校・子どもの家族・地域までを変えるとは、夢にも思っていなかった」

山城会長は目を輝かせ、言葉を続けた。

「ただ、間違いなくこの事業は五年以内に一億円産業になるだろうという確信はあった」

民泊事業で最も忘れてはならないのが、人の命を預かるということである。

去年の五月、那覇へ出張していた山城会長に、一本の電話が入った。

「会長ごめん、今子ども一人ＩＣＵに送った」

海水浴をしていた一人の子どもがおぼれたという。山城会長の血の気が引いた。那覇から約六十キロメートルの名護まで車をぶっ飛ばしながら、いろいろなことが頭を過った。その子に万一のことがあったらどう責任を取るか。病院に到着するまでには腹をくくった。自分で始めたことだ。何があってもすべて自分が責任を取ろうと。

ＩＣＵの中で酸素マスクや点滴を受けている子どもの姿を見て、呆然とした。

「今は大丈夫です」

と看護師。肺に海水が入ったら、自然治癒力で海水を輩出するまでには二週間かかる。その間、風邪などのウィルスが入った時に治療できるのはＩＣＵの中だけだという。

「命には別状ないんだ！」

肩の力が抜けた。待合室には先生と子どもを預かっている民家の親父、添乗員の三名が待機していた。両親は翌朝一番の飛行機で来るとのこと。

翌日、名前を書いた紙を掲げ、那覇空港の到着口で待つ会長。昼の十二時を過ぎたころ、目を真っ赤にした母親と父親の姿があった。

「息子さんは大丈夫です。命には別状ありません」

三日後、子どもは退院して両親と一緒に帰っていった。あの時…、母親の顔を見た時、民泊は絶対に中途半端な気持ちでやってはいけない、させてはいけないと心の底から思ったと、山城会長は振り返る。

民泊事業にはもう一つ怖い一面がある。法定伝染病である。

昨年の二月、沖縄本島と伊江島への修学旅行を控えた学校で、二十名の子どもがインフルエンザを発して、修学旅行をキャンセルした。まず沖縄本島で一泊した子ども達から十名が救急病院へ担がれた。二泊目が伊江島だった。全員がマスクをして約五十軒の民家に宿泊し、翌日無事離村した。

その二週間後、伊江中学校の二学年が学年閉鎖した。五十軒の民家にインフルエンザの菌がばら撒かれた結果である。一軒で全員を受け入れて、生徒を隔離できるなら、ウィルスが蔓延することはない。しかし、民泊はそうはいかないのだ。こうした危険も孕んでいることを認識しなければならない。

山城観光協会長と役員の強い信念でここまで成長したという伊江島の民泊事業。その成功の要因は一軒一軒の受け入れ民家にある。約百二十軒の民家が登録しているというが、それぞれが真心を持って子ども達を受け入れているからこそ、子ども達はリピーターとなってまた戻って来る。だからこそ、春休みや夏休みは、島は子ども達の家族でいっぱいになる。大学に入った記念に、留学が決まった記念にと、節目ごとに遊びに来る青年もいる。

島ではどんな小さな会合でも、民泊の話で持ちきりだ。お金がなくても、資本がなくても、島の住む人達のやる気と、協力心と、それをコーディネイト（動かす）人がいれば、億単位の産業が生まれるということを証明した伊江島の民泊事業。コミュニティービジネスとして、全国に先駆けて成功したことが、伊江島観光協会の自信となっている。